

高き志【にころざし】

地域とともにある

勢いのある学校

No. 4 (R元. 5. 10発行) 文責 校長 福田雅也

視点を変える

もう、30年以上前の話だそうですが、ある小学校のテストで次のような問題が出題されました。
「氷がとけたら何になる？」

ほとんどの子どもたちが「水になる」と答えたそうですが、一人だけ次のように答えた子どもがいました。

「春になる」

この子どもの解答に対して教師は×をつけ、不正解にしました。母親がこの事実を朝日新聞に投書したところ、それが天声人語（朝日新聞の一面に載るコラム）に取り上げられたため、当時、話題になりました。また、その後もいろいろな場所で取り上げられているので、ご存知の方も多いのではないのでしょうか。

「氷がとけたら春になる」…なんと、純粋な答えでしょうか。豊かな感性とはこのことなのでしょう。

また、以前聞いたある講話の中では、こんな話も聞きました。

「南極に住んでいる動物を三つ答えなさい」という問題が出題されたそうです。

通常なら、答えは「ペンギン」「アザラシ」「クジラ」等になるのでしょうか。間違えやすいのが、北極にしかない「白熊」ということになります。

ところが、この問題に、次のように解答をした児童がいたそうです。

「ペンギンのお父さん」「ペンギンのお母さん」「ペンギンの赤ちゃん」

これもまた、実に微笑ましく、心洗われる解答です。

これらの話は、日本の画一的な教育制度の問題点として語られることが多いようです。（天声人語でもそのような扱いでした）もちろん、私もその問題点は感じます。しかし、もっと単純に「視点を変える」ことの重要性とおもしろさを伝えてくれる話でもあります。

「水になる」等の通常正解と考えられる答えは、常識的な科学的視点からの答えといえるでしょう。「春になる」等の答えは、その常識にとらわれない、その他の視点からの答えといえるのではないのでしょうか。物事を、決まった視点からだけ見ていたら気づかなかったことが、違う視点から見たら劇的に変化したり、道が開けたりすることは多くあることです。

私達大人は、自分の立場ではなく、子どもの立場から物事を見てみることで「子育て」や「教育」の方向性を見出すことができるのではないかと日々考えています。

そして、私達教師は、「教師が教えなければいけないこと」を「子どもたちが学びたいこと」に変える力量や感性を身につけていかなければいけないのです。

実はこの話、本校の初任者である4年生担任の朝倉先生に「教師にとって一番大切なことは…」という内容で伝えたいと思っていることでもあるのです。